

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	谷 綺音
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
博物館等施設の展示にみる自然の社会的構成に関する考察			
論文審査担当者			
主査	教授 浅野 敏久		印
審査委員	教授 フンク カロリン		印
審査委員	教授 小野寺 真一		印
審査委員			印
〔論文審査の要旨〕			
<p>谷綺音の学位請求論文は、自然が社会的にいかにつくられるかという「自然の社会的構成」論と、博物館のもつ政治性論等を背景として、瀬戸内地域の水族館（3館）と屋久島の展示施設（4館）を事例に、地域の自然環境がどのように描かれているのかを明らかにすることを主目的としている。</p> <p>そのために、展示施設の解説文の文字情報を収集し（水族館 138,439 字、屋久島 63,890 語）、テキスト分析を行った。分析に際して「演繹的視点のテキスト分析」と「帰納的視点のテキスト分析」の2つの切り口からアプローチした。前者を適用したのは瀬戸内地域の水族館で、先行研究に基づいて設定した枠組みをもとに、水族館の展示において「(あえて) 触れようとしていない話題」を探った。後者を適応したのは屋久島の展示施設で、展示の文字情報を KH coder（テキスト分析ソフト）を用いて解析した。この方法では、どのような話題が多く出現しているのかを数え上げ、語の使われ方を調べた。</p> <p>また、発信側の分析に加えて、情報の受け手の状況を把握するために、水族館に関しては全国を対象とした WEB アンケート調査（1,042 人）、屋久島については観光客のクチコミ情報（3,345 件）の計量分析を行った。</p> <p>これらより、海の豊かさを伝えたい水族館側と、珍しい生き物を見、非日常空間を楽しみたい市民側との意識の差を示すとともに、海の環境問題（公害や地球温暖化問題など）や人の暮らしと海の関係のような人文社会的情報が避けられていることを明らかにした。また、屋久島の調査からは、生物多様性や学術的価値を強調する展示施設側と、自然の神秘性や審美性に期待する観光客の認識の差を示すと同時に、島民と自然の関わりや島の環境問題を扱わないという水族館と同様な傾向を明らかにした。</p> <p>なお、論文の構成としては、第1章「はじめに」で研究の背景、目的と方法、調査対象、論文の構成を示した。第2章「本研究の学問的位置づけ」では、研究の位置づけを「社会的自然」研究、博物館研究、メディア研究などに目配りしつつ丁寧に行った。第3章「瀬戸内海地域における自然表象」では、須磨海浜水族園、宮島水族館、海響館を対象に、館内展示の文字情報を、事前に設定した枠組みに従って分類し、その結果を考察した。第4章「市民が抱く水族館のイメージ・海の自然理解」では、全国約1,000人を対象としたWEBアンケート調査の結果を</p>			

示した。第5章「島の観光と「自然」の表象：屋久島の展示施設を事例に」では、屋久島世界遺産センター、屋久杉自然館、環境文化村センター、歴史民俗資料館を対象として、解説文のテキスト計量分析を行った。第6章「観光客の自然についての語り」では、観光客のクチコミ情報をトリップアドバイザーのコメント欄から収集し分析した。第7章では、全体を通じた考察として、水族館が表現したい自然、市民の水族館認識、情報発信側と受容側のギャップ、自然についての語りの違い（展示施設の特徴、観光客のクチコミ情報）、解説文と観光客のクチコミのズレ、地域イメージの創造における強調と排除、人間生活と自然環境の分断などを論じ、第8章「おわりに」で全体をまとめた。

以上のように、本研究は、事例研究をもとに、一見中立的に見える自然の展示や解説に、特定の社会的な価値基準が影響していることを改めて示すとともに、自然の展示において、環境問題や人文社会環境への言及を、消極的排除ともいえるべき避ける傾向が認められ、環境教育の役割やSDGsへの貢献が期待される博物館等展示施設の課題を浮き彫りにしたと評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。